町長発！〝がんばるトーク〟



町長　上川 元張

今年もまた8月15日を迎えました。広島、長崎への原爆投下、そして終戦を迎える8月は、私たち日本人にとって特別な月です。

戦後80年の節目の年であった昨年は、全国で様々な式典や催しが行われました。若桜町では、町遺族会が戦争体験の記録集「余白の響き」を発行し、反響を呼びました。81年目の今年も、町内では、戦争の悲惨さ、平和の大切さを次代に伝える取組が行われました。

町遺族会は7月3日に若桜学園で平和教育を行いました。今年は神谷正實さん（小船）と福山繁さん（須澄）のお二人を講師に、神谷さんはお兄様が満州に渡ってのち戦没し、自らも現地で赤痢に感染し死を覚悟した体験を語られました。福山さんは日中戦争で戦死されたお父様が銃後を守るお母様に送られた陣中日記や手紙のやり取りと、大黒柱を失ったご家族の戦後のご苦労を語られました。お二人とも戦争の理不尽さ、愚かさを強く訴えられました。福山さんのご家族の戦争体験は、後日、日本海新聞の社説で詳しく取り上げられました。

また、7月4日から8月2日までたくみの館で「戦時下の女性と子供」をテーマに企画展が開催されました。昭和に入り、日本が次第に戦争へと突き進む中で、女性や子供たちの日常生活が戦争一色となっていく様子が実感できる展示でした。兵士の無事を祈り一人一針縫いつないだ千人針、手紙やお守りやキャラメルなどを詰めて兵士に送った慰問袋、質素な服装を強いる婦人標準服の型紙、物資統制下での生活必需品の購入通帳、兵隊や武器がデザインされた子供の服、茶碗、玩具、教材や文房具など、「もの」たちが当時の世相を雄弁に語っていました。2階には婦人雑誌「主婦の友」が約50冊展示され、戦況の悪化とともに表紙の女性モデルから笑顔が消え、戦意をあおる見出しも目立っていく様子が伺えました。



▲軍事教練で袖の傷んだ戦時下の学生服（たくみの館）

総数約300点の資料は、清水章宏さん（上町）が個人で長年収集されたものです。会場で来館者に展示の説明をされていた清水さんは、戦時下の具体的な「もの」に触れることで戦争を感じ取ってほしいと、展示の思いを語られました。

盆休みに「戦争ミュージアム」（梯久美子著　岩波新書）を読みました。この本は、先の大戦の記憶の継承を目的とする全国14の博物館を旅した記録です。原爆や東京大空襲の犠牲者のほか、特攻や人間魚雷で兵器として扱われた若者達、疎開船対馬丸の撃沈で犠牲となった多くの子供達、壮絶な引揚げを余儀なくされた満蒙開拓団、長期間の過酷な強制労働に従事したシベリア抑留者、ソ連軍の突然の侵攻で引揚げを強いられた樺太移民など、施設ごとに、多様な戦争犠牲者に焦点を当てた展示内容が紹介されています。

これらの施設には、例えば、画学生が出征前に描き遺した妹の絵、対馬丸で亡くなった幼い姉妹のランドセル、実物と同じ重さの焼夷弾の模型、シベリア抑留者が白樺の樹皮に記した日記など、戦時を語る「もの」が大切に保管・展示されています。著者は、直接会って話を聴ける体験者が減る中で、こうした「もの」たちは、資料の域を超えて歴史の証言者となり、今と過去をつなぐ仲介者となってくれるのではないかと書いています。たくみの館の展示を見た私も全く同感です。清水さんも含め、資料の来歴を調査・研究し、記録を整理し、わかりやすく展示を工夫される各館の学芸員やスタッフの皆さんに深く敬意を表します。

いつかこの「戦争ミュージアム」を訪れたいとの思いを強くした、そんな8月でした。